



『トクシマ・アンツアイガー』

第 17 号

徳島 1915 年 7 月 25 日

なぜわれわれには植民地が必要か（2）

世界のすべての貿易国の中でドイツは第二位であり、しかも第一位の国からそれほど引き離されているわけではない。ドイツの貿易総額は、1908 年に 150 億マルクになり、そのうちの 1,500 万マルクがわれわれの植民地の関与分であった。われわれはなによりも、多岐にわたる産業部門に半加工製品、例えば木綿や生ゴムなどを仕入れるために、外国とその植民地に完全に頼らざるをえない。木綿については、その入手のために本国の繊維業界だけで毎年 5 億マルクを支出しているのである。さらにわれわれは、ドイツの気候では栽培できない外国産食料品、例えば米やトウモロコシ、コーヒー、カカオ、茶、ほとんどの香辛料、またタバコ、油脂作物なども取り寄せている。

しかし、われわれはこれらのものを今までつねに十分得ることができて

いる。ではなぜこの目的のために植民地が必要なのか、という多くの人の声が聞こえてくる。

今の戦争がわかりやすい例で、それは、ドイツのような工業国にとって、その国自体が重視しているこれら不可欠な品目の生産地域がいかに必要かということを示すものだ。大きな戦争が起こり、それにドイツは巻き込まれないが、イギリスが今の戦争で例えば生ゴムについて施行したような輸出禁止令を植民地向けに出した場合を想定してみよう。そうすると、ドイツが戦争に直接関与していなくても、ドイツの大規模なゴム工業は、その大部分が操業を停止せざるをえないだろう。ここで生ゴムについて言えることは、われわれが外国に依存せざるをえない他のあらゆる品目についても、当然同じ程度に当てはまる。一方、木綿の大凶作があって、アメリカとイギリスが自己の重要な紡績工業を守るために、本国や植民地に木綿の輸出禁止令を出すと考えてみよう。すると、まったく自動的に何十万ものドイツの労働者が食い扶持を失うことになり、こうしてわれわれは、木綿織物の供給に関して外国の好意にすっかり身を委ねることになるだろう。これらの外国製品の価格形成という点でも、自国での生産が多ければ、大きな影響力を持つことができるだろう。

それから特に考慮しなければならないのは、これらの品物のためにどれほど巨額の金が毎年外国に出てゆかねばならないかということだ。生産と仲介貿易による利益のすべては、諸外国の懐に流れ込むのである。

われわれが生産力のある植民地を持っていれば、まったく話は変わってくる。われわれの植民地における多種多様な作物の栽培によって、幸先のよいスタートが切られた。しかし、今のところそれは何と言っても取っ掛かりにすぎないのであり、われわれの所有地は、この点に関しては開戦時にはまだ発展途上であった。だが戦争ののちには、自分たちの植民地に対する愛と理解が、ドイツ国民のすべての層において、われわれのすべての関心の中でこれまでよりももっと大きく、深いものとなることを期待しよう。というのも、国民のすべての階層にとって、発展可能な植民地がきわ

めて重要だということを、われわれは証明したと信じているからである。

日本の歴史（15）

18 世紀の終わりから 19 世紀のはじめにかけて、ロシアとイギリスが、日本との友好的な関係を開拓するわずかばかりの試みをおこなったが、その結果は外国に対するこの国の閉鎖状態をいっそうきびしくしただけであった。たしかにオランダ人たち（彼らに雇われたドイツ人医師フォン・ジーボルトは傑出したはたらきを見せた）は、通商交易によって、ヨーロッパ文化に好意を寄せるかなりの人々を作り出した。しかし、それは限られた範囲の人々にすぎず、彼らが政治的に力を持つことはまったくなかった。1853 年、アメリカ合衆国が通商条約の締結を要求し、威嚇的な蒸気船の艦隊を派遣してこの要求に相応の重みを加え、さらにロシアも同様の要求を突きつけると、幕府は動揺した。そして朝廷と諸大名に意見を求めたのである。朝廷と諸大名は、鎖国を解くことに反対であった。民衆の中でも外国人に対する大きな憎しみが示された。それにもかかわらず、アメリカとロシアの要求をあえてしりぞけることはできなかった。そんなことをすれば、戦争という厄介な事態が起これ、武力に優れた外国によって国が敗北するだけだということを恐れたのである。そこでまずは、最も悪い港のうちの二つが、アメリカ人と、その後まもなくロシア人、イギリス人、オランダ人にために開かれた。この措置に対して憤激の嵐が国中で起こった。尊皇派は、幕府に対して高まる不満を、天皇を昔日のような権力の座に復位させるための世論操作のために利用した。国内の開国派は、幕府のために実際に役に立つほどの力をまったく持たなかった。1858 年、天皇が同意を拒んだにもかかわらず、アメリカとの間に、前よりもかなり改善された新しい通商条約が結ばれた。まもなく、ロシア、イギリス、オランダ、フランス、プロイセンとの同様の条約が成立した。これによって、幕府に

対する憎しみは大きくなっただけであった。京都には、徐々に尊皇派の大名たちが集まってきた。1862 年、将軍は京都に参上したが、外国人を追い払い、さまざまな政治改革を実行することを要求された。将軍はこの要求に従わなかったため、天皇は大名たちに、外国人を日本から追放する命令を出した。東京〔江戸〕にあったアメリカとイギリスの公使館は焼き払われた。フランス、アメリカ、オランダの船は、下関海峡通過のさいに砲撃された。その報復として、海峡の要塞がイギリス、フランス、アメリカ、オランダの軍艦に砲撃され、占領された。日本は 300 万ポンドの賠償金を払わねばならなかった。また、この国の習いであった大名への敬意を表わさなかった一人のイギリス人が殺害されたが、その結果、九州の鹿児島町が破壊され、さらに 10 万ポンドの賠償金が支払われることになった。

つづく

攻囲された青島から（1）

おそらくわれわれの読者の多くに知られていると思われる青島の伝道教区監督フォスカンプは、「ベルリン福音派伝道協会」の出版物の中で青島攻囲戦に関する日誌を公開した。以下は、『テークリッヒェ・ルントシャウ』からの抜粋である。

11 月 7 日—この日から続いた日々は、われわれには永遠と思えるほどであったし、その印象は死ぬまでわれわれにつきまとうことだろう。それは筆舌に尽くせぬ恐怖の日々であり、はるか昔からの世界の歴史によって輝かしい模範として称賛されるような英雄的な勇気の発揮された日々である。外界のいっさいの艱難辛苦に対する内面の勝利の日々である。同胞の命を救うためにわが身が粉微塵にされてしまうような日々である。手足を撃ち碎かれて運び込まれる人々の叫びと呻きの日々である。苦痛と不安の

日々であるが、しかし予言者の言うように、そこに力が生まれることはなかった。それは怒りと涙の日々であり、戦いは荒れ狂い、死神がほくそ笑みながら青島の周囲の丘を越え、町の路地にも入り込んできて、あの優勢な敵を打ち負かせる希望はわれわれからどんどん消えていった。けれどもわれわれの同胞たちは戦った。そして「ドイツの復讐の女神」[Furor teutonicus] は、ものを嘗めつくす火のように怒りを発したので、そうした不屈の勇気と決死の覚悟に対する恐怖が敵を襲った。「われわれは青島を占領はした」と、突撃のあと日本の高級将校は言った。「しかし諸君ドイツ人は勝利者でありつづける。」

日本軍の將軍 — 彼が青島の街を騎行するのを見たが、その顔は古代ローマ人のようだった — は、ビスマルク砲台の司令官に会いたいという要望を口にしたという。この司令官は、重榴弾砲の一撃ごとに死をもたらす正確さで、日本軍の砲兵陣地を再三再四破壊したのだ。それは、私が会ったドイツ軍の高級将校たちの判断によれば、戦史はじまって以来の恐ろしい砲撃戦であった。一週間のあいだ夜も昼も砲弾や鉄の破片がうなりをあげて空中を飛び交い、あたかも聖書の詩編にあるように海が荒れ狂い、逆巻いて、その猛威のために山々が崩れるかのようであった。そして — 何という奇妙なイメージが、このような最もきびしい苦難のときに魂の前に現れてくることか — 現世の王である悪魔が、湾の向こう側の真珠山系のでこぼこの稜線に居座り、ふもとの山や谷で人間どもが戦い、殺し合っているのを見て、嘲りながら地獄の歌を奏でているかのようであった。夜、地下室の固い寝床に横たわっていると — ドイツの植民地が死の痙攣の中で横たわっているときにだれが眠ることができただろう。 — 五つの歩兵陣地に大地を揺るがすような砲撃が加えられるのが二秒ごとに聞こえた。それはまるで、重い土塊が巨大な棺の上に転がってくるように、鈍く重々しい音だった。そのとき私は、激しい苦悩に心臓が縮みあがるように感じた。あそこの装甲室の中で、われらの同胞たちが身を伏せ、突き出た岩の下や深い穴の土壁に身をかがめて、敵が大砲から打ち出す圧倒的な砲火からた



だ身を守ろうとしていたのだった。砲台は何時間ものあいだ、舞い上がる砲煙と砂ぼこりと砕け散る岩塊で、闇に覆われていた。そのため、落下する砲弾の閃光で目が眩んだ兵士たちには、まったく何も見分けられなかった。しかし、彼らの大砲からは次々に砲声がとどろき、壊れかかった砲身からさえも砲撃は続き、文字通り最後の一弾まで打ち尽くされた。そうしてのちに砲身は爆破されたが、ある砲員長は病室で戦友たちにこう言っていた。「そのとき私の頬には涙が流れた。そんな大砲が、まるで生きているもののようにいとおしくなるからだ。戦友よ、大砲は命のない鉄の塊にすぎない。しかし、それが火を噴くときには、一発ごとに心臓がそれにつれてどうしようもない願望とともに鼓動し、耳は鋭敏に弾の行く先を聞き分ける。地面に落ちるのか、岩に当たるのか、それとも固い金属に当たって激しい火炎が噴き上がるのかと。」

つづく

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 27 問解答

1. Lg8 - h7 任意の手
2. D か S で詰み

第 28 問解答

1. Db3 - a4 + Kc6 x b6
2. Le6 - d6 Sa8 - c7
3. Ld6 - c5 ≠
 1. Kc6 - c7
 2. Le7 - d8 + K 任意の手
 3. D で詰み

正解送付者：ヨーゼフ・ヴェーバー、H. ローデ

R へ 回答は編集部へ送付のこと。『トクシマ・アンツアイガー』は使用を留保する。

第 29 問

白：Kg4, Dh4, Lf1, g1, Se4, f3, Bh5

黒：Kd3, Da1, Lc2, Se2, Ba2, b3, c4, e5

2 手詰め。

第 30 問

白：Ka4, Dg8, Lc8, Bc7, e3

黒：Kc6, Bd6, e4, e5, e7

3 手詰め

「エムデン」上陸隊体験記（3）

こうして私は、「チョイジング」でアデンに向けて航行した。「チョイジング」のホルツ少尉が聞いたところによれば、アラビア鉄道はもうペリム海峡近くのホデイダまで通じているようだ。そこに家のある船医ドダウンバングが、マイヤーの旅行文庫の本で確認したとのこと。イギリス人は、この鉄道をものにすることをずっと夢想していたが、結局占領できなかった。そんなことをしていたら、メッカへの旅が困難になるので、イスラム教徒たちをすっかり憤慨させていたことだろう。われわれが一番望ましいと思ったのは、さっさと急行列車に乗って、うまい具合に北海まで驀進することだった。いずれにせよ、アラビアを通れば確実に故国へ帰ることができる、と考えていた。紅海の地図は持っていなかったが、これが敵に向かう最も近い道だった。敵に会うのがアデンなのかドイツなのかは知らないが。さあ、勇気をふるってアデンに向かおう。

1月7日、午後9時と10時のあいだにわれわれはペリム海峡をすりぬけたが、ここはずっとイギリス人だらけである。われわれは、アフリカの沿岸を進み、イギリスのケーブル敷設船のすぐそばを通り過ぎた。最高にいい気分だ。われわれがすんなりペリム海峡を通過したと聞いたら、イギリス人はすっかり頭にくるだろう。次の晩、沿岸の海上にいくつかの明かりが見えた。あれはホデイダの防波堤にちがいないと思った。われわれが夜中に距離を測ってみたところでは3,000メートルだったが、これは違うはずだと考えた。空が白みはじめたころ、二本マストと四本煙突の船がみとめられた。それは敵艦、それもフランスの装甲巡洋艦であった。そこで私は「チョイジング」に、沖に出て夜戻ってくるよう命令した。翌日とその晩も同様である。それからわれわれは、4艘のボートの準備し、それを日の出の時に、何も感づいていないフランス人たちの目の前で、陸に引き寄せた。うねりは激しかった。何人かのアラブ人が近づいてきて、それからアラブ人の沿岸警備隊との厄介な交渉がはじまった。われわれは、例え

ばホデイダがイギリスのものなのかフランスのものなのかも知らなかったのだ。われわれは手を振り、武器を置き、身振り手振りで話した。集まってきたアラブ人たちは、二本の指を擦り合わせた。「われわれは味方だ」という意味である。しかしこちらは、「われわれは摩擦を起こしている敵同士だ」という意味だと思った。そこで私は「バンバン」と言って、軍艦の方を指差した。とにかくわが方は機関銃を組み立て、戦闘準備を整えた。しかし、ありがたいことにアラブ人たちに「ジャーマンズ」という言葉が通じた。これで助かった。まもなく百人ほどのアラブ人がやってきて手伝ってくれた。ホデイダに入るときには、トルコの兵隊たちが同盟者・友軍として敬礼してくれたが、彼らはわれわれを迎えるためにかき集められたところだった。鉄道の「て」の字もないとはいうものの、われわれはたいへんな歓待を受け、この先ずっと陸路で大丈夫だと保証された。そこで私は、夜になって赤い信号弾を打ち上げて、「チョイジング」は出発すべし、敵が近くにいと知らせた。陸路の安全の調査と確認には時間がかかった。六日ほど内陸部に行ったところに健康によい高地があり、熱病になった仲間がそこで休養できるということも耳にした。それで私はまず、サナに向かって出発することに決めた。皇帝の誕生日に、われわれはトルコの部隊といっしょに大規模なパレードをおこなった。すべてはフランス人たちのすぐ目の前でおこなわれた。同じ日、われわれは高地に向かって進んだ。

つづく

日本の農業（４）

その他の日本の商業作物の中では、綿花と藍にも触れておくべきであろう。とはいえ、国内で収穫される綿花は、日本の工業の需要を満たすにはまったく不十分なので、この原料を大量に輸入する必要がある。

藍は、蕎麦に近い植物である。その栽培には非常に多くの肥料が必要で、

これが高くつくので、藍の売値の大部分は肥料代ということになる。最近、藍染料は化学的な方法ではるかに安価で製造されており、とりわけドイツが大量にこの人工染料を日本に供給している。

日本の政府は、自国の農業をさらに発展させることに大きな関心を示しており、かなり前からヨーロッパの先進的な農業経営法を日本の農民にも手ほできしようとできるかぎりのことをしている。政府は農業学校を創立し、出費をいわずヨーロッパから教師を招いて、授業に必要な諸々の材料を調達している。

こうして獲得された知見は、日本の農業にどんどん利用されているのだが、そのことは、化学肥料に投入された費用が、1903年の2600万マルクから1905年の4400万マルクに増えたという事実を挙げるだけでももう明らかである。日本の農業は、その達成能力の限界に達したというにはほど遠い。まだ荒れ地のまま残されている広い平地を、これから開墾することができる。この目的のために、そして新たに得られた土地に定住する農民を入植させるために、東京に何年前かに100万円の資本を持つ会社が設立された。

完



シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アンツアイ
ガー』17号（1915年
7月25日）ユーモア
付録

イギリス人はわれわれを兵糧攻めに
するつもりか。とんでもない。



平和の天使、アンクル・サム？



われらは勝たねばならない

やつらに屈服はしない。

われらが神聖なる祖国ドイツは。

そのことを昔ながらの忠誠心で

わが強き手の剣が証明した。

敵が四方から寄せて来ようとも、

東、西、

北、南から

来ようとも、

すべて打ち負かそう

ではないか。

戦いがいつまで続こうとも。

そうだ、われらは勝たねばならない。

そのために皆、力を合わせるのだ。

神はつねにわれらとともにある。

わが神聖なるドイツの祖国よ。



Liebesgabe und Eifersucht



慈善の贈り物と嫉妬

P 町に住むある一家の娘が、慈善の贈り物として手編みのマフラーと葉巻にカードをつけて戦場に送った。カードには、見知らぬ受け取り手に、このプレゼントが彼にとってうれしかったかどうかを、ぜひ知らせてほしいという要望が書かれていた。これが思いがけない効果をもたらした。まもなく次のような手紙が届いたのである。

「拝啓、お嬢様。

主人から、あなたのカードが同封された手紙を受け取りました。遠い戦地にいる兵隊さんたちのことを忘れないでいてくださるのを、たいへんうれしく思います。でも、独身の殿方のことをもっと気づかってあげて、二児の父親である私のカールのような既婚男性を、このようなことで煩わせないでください。今のところ私は、自分の夫に物を持たせてやることはできていますし、しかもどんな点でも満足させてやっています。ですから、今後はもう夫を悩ませないでください。彼は私で十分なのですから。

H. 夫人より」

話題のお嬢様は、11 歳の若きレディーであった。